

## 令和5年度佐世保市『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』アンケート調査に関する報告書

門田 理世(西南学院大学大学院)

中ノ子 寿子(西南学院大学大学院生・尚絅大学短期大学部)

増田 吹子(西南学院大学大学院生・尚絅大学)

土田 珠紀(西南学院早緑子供の園)

江田 菜穂子(西南学院大学大学院生)

佐世保市幼児教育センター

### 調査結果概要【本文中の参照箇所】

#### 1. 保護者が得た満足感と子育ての不安や負担感の軽減

- 参加した保護者は、全員が事業への満足感をもっていた【p.4】
- 日頃関わることのない小学生とふれあえたことや小学生の学びに貢献できたことに喜びを感じていた【p.4】
- 複数回の事業参加を通して、小学生の心身の発達に気付き、我が子の成長モデルをイメージできたことにより、今後の子育てへの期待感をもった【p.5-6】

#### 2. 小学校の心の育ちを支えた実体験

- 赤ちゃんとの実際のふれあいを通して、赤ちゃんを愛おしく思う気持ちや成長への興味を感じていた【p.6-8】
- 複数回のふれあい体験により、赤ちゃんに対する感情が肯定的なものへ変化した児童がいた【p.8-9】
- 心が動く実体験により、自己肯定感が高まることが期待される【p.10】

### 調査結果より得られた佐世保市への提言【本文中の参照箇所】

#### 1. 事業の継続と拡大

- 事業の価値を感じた保護者から、事業の拡大や継続を期待する声が上がった【p.10-11】
- 従来は参加していなかった小学校からの新たな参加申し込みがあった【p.2】

#### 2. 複数回の事業開催

- 『赤ちゃん事業』『おおきくなったね』の両事業に参加した保護者は小学生の成長に気付いていた。【p.6】
- 事業参加を楽しみに思っていなかった小学生が、2回のふれあいの後には赤ちゃんとの関わりに前向きな気持ちになった。【p.8-9】

## I. はじめに

佐世保市は平成27年度より、佐世保市幼児教育センターにおいて『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』(以下、『赤ちゃん事業』)を実施している。本事業は子育て支援啓発事業の一環として、参加する保護者が①親としての喜びを感じる、②自分の子育てを振り返る、③自分の子どもの成長や将来をイメージする、④小学生と関わることで地域の一員としての存在を意識することを目的とする。また、参加する小学校の児童(以下、小学生)にとっては①命の大切さ・尊さ・不思議さ、②相手を思いやる気持ち、③自分の家族(親)との関係を考えるきっかけ、④親の思いを知る、⑤将来の子育てを体験する機会となることを期待している。佐世保市教育委員会は、学校・地域・家庭が連携して命の大切さについて考えるため、毎年6月を「いのちを見つめる強調月間」、6月1日を「いのちを見つめる日」と定めており、本事業はその取り組みにも寄与するものである。

本事業は新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行に伴い、本年度からは小学生と赤ちゃん及びその保護者の接触に制限を設けない対面形式で交流が行われた。以下、今年度の『赤ちゃん事業』及び関連事業の『おおきくなったね』に参加した赤ちゃんの保護者と小学生、それぞれの立場から事業の意義を検証した結果を報告する。

## II. 調査の概要と分析手法

以下、『赤ちゃん事業』と『おおきくなったね』の両事業の概要と調査・分析対象について記す。

### 1. 事業の概要と分析対象

#### (1) 『赤ちゃん事業』について

今年度6月と11月に行われた『赤ちゃん事業』は、赤ちゃん延べ46名、赤ちゃんの保護者延べ48名(内、2組が夫婦で参加)、合計46組の親子が参加し、小学生は白南風小学校5年生44名(欠席者4名を除く)、潮見小学校6年生25名(欠席者2名を除く)、木風小学校6年生31名(欠席者1名を除く)、船越小学校5年生22名、合計122名が参加した(表1)。赤ちゃんの保護者は、普段から幼児教育センター内の子育て支援広場を利用して職員から事業への参加を打診された場合もあれば、他の支援センターから『赤ちゃん事業』に関する紹介を受けて参加したり、『赤ちゃん事業』に関する取り組み・報告書が載ったホームページを見て自分から参加を申し込んだりした場合もあり、事業への参加経緯は様々である。同様に小学校の参加経緯も多様で、過去事業に参加したことのある学校に幼児教育センターから連絡をして参加を呼び掛ける場合もあれば、小学校側から参加を希望して幼児教育センターに申し出がある場合もあった。昨年は2校の小学校のみの参加であったが、今年度は4校の参加があった。

小学生は、『赤ちゃん事業』当日赤ちゃんやその保護者と交流をする前に、担任・養護教諭による講話や妊婦の方の体験談の紹介、赤ちゃん人形を使った抱っこ練習といった内容の授業を通して、胎児期の様子や、生後の成長発達、赤ちゃんとふれあう際に気を付けること等について事前学習をしている。事業当日は、小学生5～6名と親子2～3組が1グループとなり、小学生が赤ちゃん(おおむね4か月～1歳2か月)の遊ぶ様子を観察しながら、保護者から子育てや赤ちゃんについての話を聞く形で交流が行われ、小学生が玩具で赤ちゃんをあやす、赤ちゃんを抱かせてもらう、絵本を読み聞かせる等の場面もあった。また、本事業は佐世保市幼児教育センターが運営しており、交流ではセンター職員や地域ボランティアスタッフがファシリテーターとして小学生と保護者をつなぐ役割を担っている。

【分析対象】事業に参加した保護者、小学生に事業前後でアンケート調査を実施した(質問項目は本報告書末参照)。『赤ちゃん事業』は、事業に参加し、事前・事後アンケートが揃っている保護者延べ48名と、小学生119名を分析対象とする。

#### (2) 『おおきくなったね』について

佐世保市では赤ちゃんとおおきくなったねの経験から一定の期間をあけて、再度小学生と赤ちゃん、その保護者がふれあう『おおきくなったね』事業を実施している。11月に行われた『おおきくなったね』では、赤ちゃん27名、赤ちゃんの保護者延べ28名(内、1組が夫婦で参加)、合計27組の親子が参加し、小学生は6月に『赤ちゃん事業』に参加した小学校から、白南風小学校5年生44名(欠席者4名を除く)、木風小学校6年生29名(欠席者3名を除く)、合計73名が参加した(表1)。参加した赤ちゃんとその保護者の中で延べ20組は6月の『赤ちゃん事業』にも参加しており、延べ7組が『おおきくなったね』からの新規参加者であった。事業の内容は『赤ちゃん事業』と同じ流れで実施され、小学生は6月よりも月齢の高い赤ちゃん(おおむね9か月～1歳7か月)と交流を行っている。

【分析対象】『おおきくなったね』に参加し、事前・事後アンケートが揃っている保護者延べ27名と、小学生73名を分析の対象とした。

表1. 『赤ちゃん事業』及び『おおきくなったね』の参加者概要

	日時	参加者数	
		親子数	小学生数
赤ちゃん事業	6/20(火) 9:45～10:30	9組	白南風小学校 5年1組 (23名)
	6/22(木) 9:45～10:30	10組 (夫婦参加1組)	潮見小学校 6年生 (25名)
	6/26(月) 9:45～10:30	8組	白南風小学校 5年2組 (21名)
	6/27(火) 10:35～11:20	10組	木風小学校 6年生 (31名)
	11/20(月) 10:25～11:10	9組 (夫婦参加1組)	船越小学校 5年生 (22名)
おおきくなったね	11/8(水) 9:45～10:30	10組	木風小学校 6年生 (29名)
	11/27(月) 9:45～10:30	9組 (夫婦参加1組)	白南風小学校 5年1組 (22名)
	11/30(木) 9:45～10:30	8組	白南風小学校 5年2組 (22名)
		合計 71組	合計 195名

## 2.分析の方法

アンケートの中で選択肢による回答は集計をし、自由記述による回答は意味内容ごとに区切ってコードを付し、抽象度がより高いコード・カテゴリに分類していく質的分析を行った。なお、一つの回答に複数の意味単位が含まれる場合は、記述に込められた回答者の思いを可能な限り汲み取るため、複数のオープン・コードを生成している。以下、オープン・コードを<>、焦点コードを[ ]、カテゴリを[ ]、アンケート本文の質問および選択肢を《 》、原文の回答を「」、回答の件数やコードの事例数を( )で表す。

## Ⅲ. 調査結果および考察

以下、『赤ちゃん事業』及び『おおきくなったね』に参加した赤ちゃんの保護者・小学生の調査結果及び考察を記す。

### 1. アンケート回答者の属性

【保護者】『赤ちゃん事業』における保護者の年齢構成は20代が10名、30代が28名、40代が9名、50代以上が1名であり、30代の保護者が1番多かった(表2)。今年度の参加者のうち、46名が母親で2名が父親である。参加した赤ちゃんは第1子が19名、第2子が14名、第3子15名であった(図1)。つまり今回参加した保護者の60.5%が兄姉児

表2. 『赤ちゃん事業』  
保護者の年齢 (延べ人数)

保護者の年齢	人数
20代	10
30代	28
40代	9
50代以上	1
合計	48

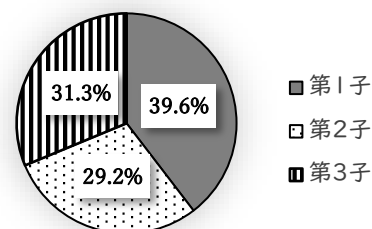


図1. 『赤ちゃんふれあい事業』に参加した赤ちゃんの出生順位

の子育て経験があり、39.6%は初めての子育て中ということになる。また、《事業の参加回数》は、14名が今回で2回目以上、そのうち3名は4回目以上と回答しており、約3割が事業に複数回参加している。《日頃、小学生とふれあう機会があるか》という問いに対し、《ある》と回答した人が27名、《ない》と回答した人が20名で、過半数の保護者が普段小学生とふれあっていることになる。《子育てに対する不安や気になっていること》については、20名(42.5%)の保護者が《ある》、もしくは《少しある》と回答しており、具体的な内容は、病気やけが等の不安や成長や発達について等が挙げられた。

『おおきくなったね』における保護者の年齢構成は20代が7名、30代が13名、40代が7名であり、30代の参加が一番多かった(表3)。参加した赤ちゃんは第1子が15名、第2子が7名、第3子が5名であった(図2)。つまり、44.4%の保護者は兄姉児の子育て経験があり、55.6%の保護者は初めての子育て中である。

表3. 『おおきくなったね』  
保護者の年齢 (延べ人数)

保護者の年齢	人数
20代	7
30代	13
40代	7
合計	27

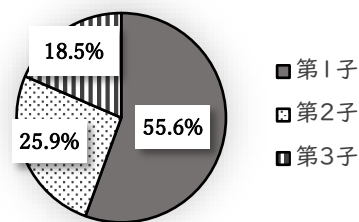


図2. 『おおきくなったね』に参加した赤ちゃんの出生順位

《事業の参加回数》は、16名が今回で2回目以上、そのうち3名は4回目以上と回答しており、6割近くが事業に複数回参加している。《日頃、小学生とふれあうことがあるか》という問いに対し、16名(59.0%)が《ある》、11名(40.7%)が《ない》と答えており、小学生と関わる機会のある保護者の方が多かった。子育てに対する不安や気になることが《ある》、《少しある》と回答した保護者は17名で全体の62.9%、《ほぼない》《全くない》は10名(37.0%)、であり、具体的な不安の内容は、離乳食の進み具合や育て方が正しいのか不安等が挙げられた。

【小学生】『赤ちゃん事業』の事前アンケートに回答した児童の兄弟構成は、兄・姉がいる小学生が64名、弟・妹がいる小学生が60名、一人っ子が14名であった。また、《これまでに赤ちゃんとはふれあう機会があったか》という問いに対しては、《ある》が83名(69.7%)で、《ない》が12名(10.0%)、《覚えていない》が24名(20.1%)で、約7割の小学生が赤ちゃんとのふれあいを経験したことがあると回答していた。

『おおきくなったね』の事前アンケートに回答した73名の児童の兄弟構成は、兄・姉がいる小学生が38名、弟・妹がいる小学生が34名、一人っ子が9名、無回答が3名であった。また、《赤ちゃん事業の後に赤ちゃんとはふれあう機会があったか》という問いに対しては、《ある》が25名(34.2%)、《ない》が42名(57.5%)、《覚えていない》が5名(6.8%)、《無回答》が1名(1.3%)で、約6割の小学生が赤ちゃん事業の後、赤ちゃんとはふれあう機会がなかったと回答していた。

## 2. 保護者アンケートの結果及び考察

### (1) 保護者が認識する事業参加の動機と事業の意義

保護者に対する事後アンケートにおいて、『赤ちゃん事業』の参加者には「事業に参加してよかったか」、『おおきくなったね』参加者には「ご自身にとって事業に参加してよかったか」を選択肢で尋ねたところ、両事業に参加した全員が「よかった」と回答した。保護者はセンター職員や友人等に誘われて、または事業を通してわが子が色々な人とふれあい、この時期の子どもにとって意義のある経験を得ることを期待して事業に参加しているが、事業後には参加した全員が事業への満足感をもったと言える。

また、『赤ちゃん事業』に参加した保護者延べ48名が、参加して「よかった」を選んだ理由についての自由記述を分析したところ、27のオープン・コード、11の焦点コード、4のカテゴリに分類された(表4)。参加してよかった理由に最も多く挙げられたのは「小学生とのふれあいに対する喜び」に関する回答であり、中でも「日頃関わる機会がない小学生とふれあえた」という理由が同カテゴリで最多であった。「日頃小学生とふれあう機会はあるか」を尋ねた設問で、「ある」が27名(56.3%)、「ない」が20名(41.7%)と、小学生との関わりが日常的ではない保護者が4割いたことを考えれば、保護者にとって小学生とふれあい、小学生のことを知る機会自体が貴重な経験と捉えられていることがわかる。同様に、事業に参加してよかった理由に「わが子にとっての事業の価値」を挙げた回答でも、「わが子が日頃関わる機会がない小学生とふれあえた」ことを理由とする回答が最多であり、保護者は自分自身にとってもわが子にとっても日頃ふれあう機会がない小学生との交流に価値があると認識し、それが事業への満足感につながっていることが示唆された。

表4. 『赤ちゃん事業』に参加した保護者が参加してよかったと感じた理由 (※一部抜粋)

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
小学生とのふれあいに対する喜び(22)	小学生とふれあえた(9)	日頃関わる機会がない小学生とふれあえた(7) 小学生とふれあえた(2)
	小学生のことを知れた(6)	小学生がしっかりしている・大人びていることがわかった(3) 小学生の成長がみえた(1) 等
	小学生がわが子を大切に扱ってくれた(6)	小学生がわが子を一生懸命あやしてくれた(4) 小学生がわが子をかわいがってくれた(1) 等
	ふれあうことに価値がある(1)	ふれあいはわが子・小学生双方にとって良い経験(1)
わが子にとっての事業の価値(19)	わが子がたくさんの人とふれあえた(12)	わが子が日頃関わる機会がない小学生とふれあえた(8) わが子が沢山のの人に可愛がってもらえた(2) 等
	わが子が事業を楽しみ、良い刺激を受けた(7)	遊んでもらってわが子が嬉しそう・楽しそうだった(3) わが子にとって良い刺激・経験になった(3) 等
保護者が受けた影響・学び(11)	自分にポジティブな思い・感情が芽生えた(5)	色々な人に声をかけてもらえて嬉しかった(2) わが子と小学生のふれあいからパワーをもらった(1) 等
	わが子の成長過程や将来を考える機会になった(5)	わが子の成長を想像でき、楽しみになった(4) わが子のことを振り返る機会になった(1)
	小学生とわが子の反応を見ることができた(1)	小学生とわが子のふれあう様子・反応を見ることができた(1)
小学生の育ちに貢献する意識(6)	小学生の学びに貢献できた(5)	小学生に出産や子育てのことを伝えられた(3) 小学生が命を大切にしようと思ってくれた(1) 等
	小学生に対して申し訳なかった(1)	わが子が動き回っていて申し訳なかった(1)

さらに、保護者は事業に参加することで「色々な人に声をかけてもらえて嬉しかった」ことや「わが子と小学生とのふれあいからパワーをもらった」ことから「自分にポジティブな思いや感情が芽生えた」と感じ、「小学生に産みや子育てのことを伝えられた」、「小学生が命を大切にしようと思ってくれた」ことから「小学生の学びに貢献できた」と考え、これらを事業に参加してよかった理由に挙げている。このことから本事業は、保護者に小学生とのふれあいを通して活力を抱かせたり、地域の小学生の育ちへ貢献できる喜びをもたらしたりしたことが明らかとなった。

『おおきくなったね』の参加者27名に「この事業で小学生と交流して自分自身に変化があったか」を尋ねた項目を分析したところ、「あった」という回答が18名となり、「なかった」5名を大きく上回った(わからないという回答が4名)。その

変化が《あった》と思うところを尋ねた質問の自由記述回答を分析したところ、17のオープン・コード、5の焦点コード、3のカテゴリに分類された(表5)。まず、小学生とのふれあいを通して、<小学生とわが子のふれあいに対する不安感が減った>り、<小学生への印象が良くなった>りと、自分の中の[小学生に対する意識・態度が変化]したことや、<小学生と緊張しないで話せるようになった>り、<一緒に過ごす自分の表情が柔らかくなった>りと、自分の[小学生に対する態度・表情が変化]したりしたという回答があった。これらのことから、保護者は小学生とのふれあいを通して自分自身の中で小学生に対する印象が良いものとなり、小学生に対する緊張感や不安感が薄れたり、柔らかい表情で接することができるようになったりするなど、受容的な姿勢に変化したことを自覚している。また、小学生の様子を目の当たりにして<わが子が今日の小学生のようになったら嬉しい・楽しみ>というように[小学生からわが子の成長モデルを連想]したり、小学生に出産や子育ての話をする中で<わが子をより大切にしたい>という[わが子を慈しむ感情が高揚]したりするなど、[わが子の将来像や慈しむ感情が生起]している。これらの回答から、本事業は赤ちゃんの保護者が交流をした小学生の姿からわが子の成長や将来像をイメージすることを助け、事業内でわが子の出産や子育てについて振り返ることから、わが子を慈しむ感情を生起させるだけでなく、小学生に対して受容的・肯定的な姿勢をもつことを促すという変化が起こることが推察される。さらに、[人とのふれあいに対する意欲が向上]することから、事業で自分自身が変化し、意義があったことを感じた保護者の中には、交流しているその場での楽しさ・面白さだけでなく、さらなる他者との交流への意欲が湧くというようにその後の意識への効果もある可能性が示された。

表5. 『おおきくなったね』に参加した保護者が認識する自分自身の変化(※一部抜粋)

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
小学生に対する意識・態度が変化(10)	小学生の印象・認識の変化(8)	小学生とわが子のふれあいに対する不安感が減った(1) 小学生への印象が良くなった(1) 等
	小学生に対する態度・表情の変化(2)	小学生と緊張しないで話せるようになった(1) 一緒に過ごす自分の表情が柔らかくなった(1) 等
わが子の将来像や慈しむ感情が生起(8)	小学生からわが子の成長モデルを連想(5)	わが子が今日の小学生のようになったら嬉しい・楽しみ(3) 小学生の心身の成長からわが子の将来をイメージした(2)
	わが子を慈しむ感情の高揚(3)	わが子をより大切にしたいと思った(1) わが子が生まれた時のことを思い出す機会になった(1) 等
人とのふれあいに対する意欲が向上(5)	他者との交流に対する意欲の喚起(5)	今後たくさんの人とふれあいたくなった(2) 今後も多様な年代の人とふれあいたくなった(1) 等

## (2) 保護者にとっての複数回事業を行う意義

6月の『赤ちゃん事業』に参加した保護者延べ19名が、約5か月後の11月に実施された『おおきくなったね』にも参加していた。その19名に対して《6月と比較して小学生の変化したところ・変化していないところ》を尋ねた質問の回答を分析したところ、表6のように分類された。なお、回答数が少ないためこの項目に関してはオープン・コードと焦点コードのみを付している。

表6. 複数回事業に参加した保護者が認識する6月と11月を比較して小学生の変化したところ・変化していないところ(※一部抜粋)

小学生の変化したところ		小学生の変化していないところ	
焦点コード	オープン・コード	焦点コード	オープン・コード
赤ちゃんへの接し方(12)	積極的に赤ちゃんに関わるようになった(5) 赤ちゃんへの接し方や遊び方が上手になった(3) どうしたらいいか戸惑う様子がみられた(1) 等	赤ちゃんへの接し方(11)	優しく赤ちゃんと接してくれる(6) 赤ちゃんとよく遊んでくれる(2) 赤ちゃんに興味を持ってくれる(1) 等
心身の成長(8)	身長が伸びて大きくなって(3) 大人っぽくなった(3) 礼儀正しくしっかりした(1) 等	交流中の態度・姿勢(8)	積極的に発表や交流をしてくれる(3) 緊張している、恥ずかしがっている(2) 質問が少ない(1) 等
コミュニケーションの取り方(3)	コミュニケーションが上手になった(1) フレンドリーになった(1) 質問内容が詳しくなった(1)	交流中の表情(2)	笑顔が可愛い(1) 優しい表情(1)

まず、6月と比べて11月の小学生の変化したところ・変化していないところの双方で1番多く挙げられたのは「赤ちゃんへの接し方」に関するものである。オープン・コードをみると、再会した小学生に対し保護者は、以前よりも積極的に赤ちゃんに関わるようになった、<赤ちゃんへの接し方や遊び方が上手になった>などの変化を感じていた。さらに複数の保護者が、<小学生とわが子のふれあいに対する不安感が減った>、<小学生への印象が良くなった>という自分自身の変化を自覚したり、<優しく赤ちゃんと接してくれる>、<赤ちゃんをよく遊んでくれる>など、数か月たっても変わらない点を感じたりしていた。事業に参加した後の自分の変化で保護者が認識していること(表5)として、「小学生に対する意識・態度が変化」の<小学生とわが子のふれあいに対する不安感が減った>、<小学生への印象が良くなった>など、保護者自身の自覚があることと合わせて考えれば、保護者は小学生が1度目の交流と変わらず、あるいはさらに、わが子と積極的に優しく関わってくれる様子を見て、小学生への印象がより肯定的なものに変化したと考えられる。数か月の間に変化した「赤ちゃんへの接し方」に<どうしたらいいか戸惑う様子がみられた>という回答や、数か月たっても小学生の「交流中の態度・姿勢」が<緊張している、恥ずかしがっている><質問が少ない>と感じたという回答からは、保護者は他者と接する際に戸惑いや羞恥心を感じている子もいるという小学生の心情を理解していることがわかる。重ねて、「心身の成長」や「コミュニケーションの取り方」に変化があったという回答があることから、保護者は見た目の変化に加えて実際に話してみなければわからない小学生の人の接し方の課題やその変化にまで気が付いており、複数回の事業参加によって保護者が小学生の実態を複数の視点から捉えることにつながったと考えられる。

さらに、今回両事業に参加した19名の内9名(47.4%)は事業に参加した赤ちゃんが第一子であり、小学生の子育て経験がない。事業に参加して「小学生からわが子の成長モデルを連想」することができるようになった(表5)と回答した保護者5名の内4名が、今回事業に連れてきた赤ちゃんが第一子である。そのような保護者の1人からは、年間5回『赤ちゃん事業』及び『おおきくなったね』に参加し、自分の変化として「今の自分の子の世話で手いっぱいですが、この先今日の小学生たちみたいに優しく成長してくれるのかなと、楽しみが増えました」という回答が寄せられており、本事業が赤ちゃんを育てる保護者にわが子の成長モデルを示し、「わが子が今日の小学生のように育ててくれたらいいな」と希望を抱かせることにつながったことも窺えた。(1)で述べたわが子を慈しむ感情の高揚や、普段関わりのない人とのふれあいの喜びと併せて、わが子の成長モデルを描くことにより子育てに見通しや希望をもてることは、子育ての不安や負担感を軽減することにつながると考えられる。

### 3. 小学生アンケートの結果及び考察

#### (1) 小学生が赤ちゃんとのふれあうことの意義

表7. 『赤ちゃん事業』に参加する前の小学生が、赤ちゃんとのふれあうときに心配なことや気を付けたいこと(※一部抜粋)

〔カテゴリ〕	〔焦点コード〕	<オープン・コード>
赤ちゃんが心地よく過ごすこと(71)	赤ちゃんとのふれあう際に気遣うこと(29)	赤ちゃんを泣かせないようにする(12) 優しくふれあうようにする(10) 等
	赤ちゃんに不快な思いをさせないために気を付けること(23)	声の大きさや音に気を付ける(13) 態度やふるまい方に気を付ける(8) 等
	赤ちゃんとのふれあい方がわからないため心配なこと(12)	赤ちゃんの扱い方や力加減がわからない心配(4) 赤ちゃんの抱っこの仕方がわからない心配(4) 等
	赤ちゃんが泣いてしまいそうで心配なこと(7)	赤ちゃんが泣いてしまう心配(7)
赤ちゃんの安全を守ること(53)	赤ちゃんの怪我や事故を防ぐために気を付けること(34)	怪我をさせないように気を付ける(7) 怪我をさせないようにふれあい方に気を付ける(6) 抱っこの仕方に気を付ける(3) 等
	赤ちゃんの怪我、事故、病気に関する心配なこと(19)	自分が赤ちゃんに怪我をさせないか心配(6) 赤ちゃんの体調が悪くならないか心配(3) 等
赤ちゃんの保護者に対して望ましい態度をとること(6)	保護者に対し礼儀正しい姿勢、言葉遣いに気を付けること(6)	保護者に対し礼儀正しい姿勢、言葉遣いに気を付ける(6)

『赤ちゃん事業』に参加した小学生119名に事前アンケートで《赤ちゃんや保護者とふれあうときに心配なことや気を付けたいことがあるか》を尋ねると、94名(79.6%)が何らかの心配に思うことや気をつけようと思っていることを自由記述で回答した。その記述内容を分析したところ、26のオープン・コード、7の焦点コード、3のカテゴリに分類された(表7)。小学生が心配に感じたり気を付けようと思ったりする内容は、[赤ちゃんが心地よく過ごすこと]に関するものが最も多く、次いで[赤ちゃんの安全を守ること]に関するものが多かった。いずれも赤ちゃんが泣いたり驚いたりしないように、また、首が座っていないことや怪我をしそうなこと等、赤ちゃんの姿を具体的に想像し、その発達段階の特性や未熟さに意識が向いていることが推察される。小学生はふれあう前に、自分が知っている情報をもとに、赤ちゃんに対して気をつけるべきこと等を具体的に想定していることがわかる。

その後『おおきくなったね』に参加する前に、赤ちゃんとうふれあうことについて心配なことや気を付けたいことがあるかという質問を再度すると、74名の内36名(48.6%)の小学生が心配なことや気を付けたいことがあるか《ある》と回答した。1回目の『赤ちゃん事業』の際と比較するとその割合は減少しているものの、抱っここの仕方がわからないことや泣かせてしまわないか心配であること等、同様の事柄に対する心配が記述されていた。このことから、小学生は赤ちゃんの特性の理解に基づき、対応の必要性和難しさを感じていると考えられる。言い換えると、ふれあうことについて緊張感を持って臨んでいると推察される。

表8.『おおきくなったね』に参加した小学生が、今後赤ちゃんとうふれあいたいと思う理由(※一部抜粋)

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
赤ちゃんとうふれあう喜び(31)	赤ちゃんとうふれあうことがよかったから(16)	赤ちゃんとうふれあうことが楽しいから(11) 赤ちゃんとうふれたら嬉しくなるから(3)等
	赤ちゃんがかわいくて好きだから(15)	赤ちゃんがかわいいから(11) 赤ちゃんが好きだから(2)等
赤ちゃんに対する興味(29)	赤ちゃんの成長を見たいから(23)	成長した姿が見たいから(14) どのくらい成長するか知りたいから(5)等
	赤ちゃんのことを知りたいから(6)	赤ちゃんのことをもっと知りたいから(5)等
次回の赤ちゃんとうふれあう機会に対する期待(11)	赤ちゃんともっと関わりたいから(6)	赤ちゃんともっと仲良くなりたいから(4)等
	赤ちゃんを抱っこしたいから(5)	赤ちゃんを抱っこできなかったから(5)
赤ちゃんとうふれあうことの意義(10)	他にはあまりない貴重な機会だから(9)	赤ちゃんとうふれあう機会が少ないから(4) 赤ちゃんとうふれあう機会はあまりなくてふれあいたいから(3)等
	自分のためになる経験だから(1)	今後赤ちゃんにさわったりすることがあるかもしれないから(1)
赤ちゃんとうふれあうことの期待と不安(3)	泣かせることへの不安(2)	泣かせてしまうと不安だから(2)
	初めて会う赤ちゃんとうふれあうことの不安(1)	初めて会う赤ちゃんになることが不安だから(1)

次に、『おおきくなったね』に参加した小学生73名に、事後アンケートで《今後機会があったら赤ちゃんにふれたり、抱っこしたりしたいか》という質問をしたところ《とてもしてみたい》《まあまあしてみたい》と赤ちゃんとのふれあいに意欲的な小学生が69名(94.5%)、《あまりしたくない》と意欲的ではない小学生が4名(5.5%)おり、《全くしたくない》という回答はなかった。小学生がその理由や今後の赤ちゃんとのふれあいについての思いを自由記述した回答について、今後のふれあいに意欲的な小学生と意欲的ではない小学生に分けて分析した。まず、赤ちゃんとのふれあいに意欲的な小学生の回答は、14のオープン・コード、10の焦点コード、5のカテゴリに分類された(表8)。内容は、[赤ちゃんとうふれあう喜び][赤ちゃんに対する興味]等、次にふれあう機会を前向きに捉えた思いが書かれていた。そこには、[赤ちゃんがかわいくて好きだから][赤ちゃんの成長を見たいから][赤ちゃんのことを知りたいから]という、赤ちゃんに対する自分の気持ちや、赤ちゃんとうふれあったことでさらに赤ちゃんへの興味が深まったと推察される理由が述べられていた。さらに、自分が[赤ちゃんとうふれあうことの意義]を見出す回答もみられた。しかし、中には、今後も赤ちゃんにふれあいたいと回答しながら

も、泣かせてしまうこと等への不安について書かれた記述(4件)もあり、不安を抱きつつも、赤ちゃんとふれあいたいという小学生の率直な思いが表現されていた。これらはいずれも、本事業における赤ちゃんとふれあう実体験を通して生まれた、小学生の赤ちゃんとふれあうことに対する前向きな心情が示された結果である。

一方、この質問に対して、今後はあまりふれあいたくないと思う理由の回答を分析したところ、「赤ちゃんを抱っこしたときに泣かれてしまったから」「怪我をさせそうだから」等の回答から3のオープン・コード、2の焦点コード分類された(表9)なお、回答数が少ないためこの項目に関してはオープン・コードと焦点コードのみを付している。

赤ちゃんが泣いたり怪我をしたりすることについての不安に関する記述は、前述のとおり本事業の実施前に行ったアンケート調査結果に示された「赤ちゃんとふれあうときに心配なことや気を付けること」での回答と一致しており、2回の事業経験を経ても

表9.『おおきくなったね』に参加した小学生が、今後赤ちゃんとあまりふれあいたくないと思う理由(※一部抜粋)

[焦点コード]	<オープン・コード>
泣かせたり怪我をさせたりすることが不安だから(4)	泣かせてしまうことが不安だから(3) 怪我をさせることが不安だから(1)等

払拭できなかった赤ちゃんとふれあうことを戸惑う要因、不安材料といえる。しかしこれらの不安は、表7に示したように赤ちゃんに対する守るべき存在としての意識や、心身の発達が未熟である赤ちゃんの特性に目を向けているからこそ生起するものと考えられる。つまりこれは、赤ちゃんとふれあう機会に誰もが配慮する事柄の中心と言え、小学生も赤ちゃんのことを理解し、赤ちゃんとのふれあいや赤ちゃんそのもの、そしてその命の大切さを感じていることを示す結果である。

## (2) 赤ちゃんとの関わりに前向きな気持ちをもっていない小学生の変化

『赤ちゃん事業』の事前アンケートにおいて、119名の内105名(88.2%)が「赤ちゃんに会えるのは楽しみか」という質問に対して、「楽しみ」「まあまあ楽しみ」と回答したが、「あまり楽しみでない」「楽しみではない」「わからない」という回答も14件あった。そのうち、6月『赤ちゃん事業』の事前・事後、11月『おおきくなったね』の事前・事後計4回全てに回答した7名のアンケート結果から、事業に参加する前は赤ちゃんとの関わりを楽しみに思っていなかった小学生の気持ちが、事業に参加することでどう変化したか考察する。

6月の事前アンケートから、赤ちゃんと会えるのを楽しみにしていないと回答した理由として最も多かったのは、赤ちゃんが苦手というもので4件あった。他は「毎日あかちゃんとふれあっているから」「あまりふれあう機会がない」といった日頃の赤ちゃんとのふれあい経験に起因するもの、「赤ちゃんとふれあうだけだから」と事業の内容に意義を感じていないものがあつた。事後アンケートでは、「赤ちゃんの様子を見られたのはよかったか」という質問に対して、7名中6名が「よかった」、1名が「あまりよくなかった」と回答している。「よかった」と回答した理由には、「ふつうだと、よく見たり、近くでみることは、そんなにならぬから」といった赤ちゃんとの関わるの機会を貴重なものと捉えているもの、「今まで思っていた赤ちゃんとはぜんぜんちがっていることを発現してきたから」といった赤ちゃんについて学べたというもの、他には命の大切さを感じられたことや今後に活かそうといったものが挙げられていた。

前述の7名は、11月『おおきくなったね』の事前アンケートでは、「赤ちゃんに会えるのは楽しみか」という質問に対して、「楽しみ」2名、「まあまあ楽しみ」3名、「わからない」2名と回答しており、「あまり楽しみでない」「楽しみでない」という回答はなくなっている。このことから、6月の事業参加前に比べると赤ちゃんと関わることへの前向きな感情をもてるようになっていることがわかる。「楽しみ」「まあまあ楽しみ」と回答した理由としては、赤ちゃんのことをかわいいと思っていること、成長を見たいこと、6月の事業が楽しかったことが挙げられており、「わからない」と回答した理由には、楽しみだが不安もあるという気持ちが書かれていた。事後アンケートでは、「赤ちゃんの様子を見ることができてよかったと思うか」という質問に対して、6名が「よかった」、1名が「まあまあよかった」と回答している。その理由は「前回と比べて、とても成長していて、自分も嬉しい気持ちになったから」といった成長を見ることができたことに関するものが4件と最も多く、他には赤ちゃんのこと知れたこと、事業が楽しかったこと、赤ちゃんがかわいかったことに関するものがあつた。



次に、前述の7名の内6月の事後アンケートにおいて、「赤ちゃんの様子を見られたのはよかったか」という質問に対して「あまりよくなかった」と回答した1名のアンケートの回答を詳しくみる(図3)。この1名は、6月の事前アンケートでは、赤ちゃんに会えるのを楽しみに思っておらず、6月の事後アンケートでも赤ちゃんの様子を見ることができたことを「あまりよくなかった」と評価している。11月の事前アンケートの「赤ちゃんに会えるのが楽しみか」という質問に対しては「わからない」と回答しており、6月の『赤ちゃん事業』を経験しただけでは、赤ちゃんと関わることにあまり前向きな気持ちになっていない。

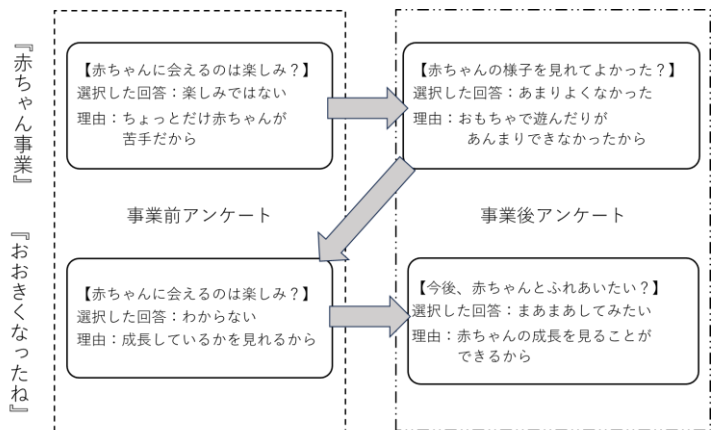


図3. 赤ちゃんとの関わりに前向きでなかった小学生の回答の変化

しかし、『赤ちゃん事業』と『おおきくなったね』の2回の事業の後になると、赤ちゃんの様子を見ることができて「まあまあよかった」、「今後赤ちゃんとふれあいたいか」という質問に対して「まあまあしてみたい」と回答しており、事業を2回経験することで赤ちゃんと関わることに前向きな気持ちになったことがわかる。その理由として考えられるのは、赤ちゃんの成長を見ることができたことである。11月の事前アンケートでは、まだあまり赤ちゃんと会えるのを楽しみに思っていないが、6月の事前アンケートよりは楽しみな気持ちが増しており、「成長しているかを見れるから」という理由を挙げている。また、11月の事後アンケートで「赤ちゃんに会って感じたこと」を尋ねる質問には「前にあったときよりも動き回っていたし、たてるようになっていてすごいなと感じました」と回答している。これらの回答から、赤ちゃんの成長を見ることができたことが赤ちゃんとの関わりに前向きな気持ちをもつことにつながったことがわかる。この小学生にとっては、2回の事業を経験することに大きな意味があったと考えられる。

(1)で述べたように、『赤ちゃん事業』『おおきくなったね』の2回の事業を経験した小学生は、赤ちゃんの成長を実感しているが、それは事業参加前に赤ちゃんと会えることを楽しみにしていなかった小学生にとっても同様であった。そして、赤ちゃんの成長を感じられたことが赤ちゃんと関わることに前向きな気持ちをもつことにつながったと考えられ、ここに2回の事業を行う意義を見出すことができる。また、7名中6名は6月の『赤ちゃん事業』の事後アンケートの時点でも、赤ちゃんとふれあってよかったと感じており、一度の事業参加でも小学生が赤ちゃんとの関わりへの価値を感じる機会になると考えられる。2回の事業に参加できることが望ましいが、たとえ1回の事業参加でも一定の意義があると言える。

#### IV. まとめと今後の課題

まず、保護者アンケートの分析結果から、『赤ちゃん事業』及び『おおきくなったね』に参加した赤ちゃんの保護者全員が事業への参加に満足しており、特に自分にとってもわが子にとっても日頃関わるのが少ない小学生とふれあえる貴重な機会になっていることを認識していたことがわかった。また、事業を通して小学生や幼児教育センター職員・ボランティアスタッフとふれあう経験は保護者に活力をもたらし、地域の子どもの育ちに貢献する喜びを感じられていた。さらに、日頃ふれあう機会が少ない小学生と交流することによって、小学生に対する受容的・肯定的な姿勢を持てるようになったり、小学生をわが子の成長モデルとして意識するようになったりするという意識の変化が生まれることも明らかとなった。複数回事業に参加した保護者の中には、6月と11月の小学生の様子を比べて小学生の内面・実態の変化に気付いている回答もあり、数か月間の小学生の変化を知ることは、1歳前後の赤ちゃんを第一子として育てる保護者にとってわが子の成長モデルを示し、わが子の成長に見通しと希望を抱かせることにもつながることが示唆された。子育てに関して不安なことや気になることがあると回答した4~6割の保護者にとって、小学生とのふれあいを通して「目先の心配や不安だけでなく、娘が小学生になるのが楽しみかつあんなふうに大きくなってほしいな…と思いました」という長期的視座を得ることは、子育ての不安感を軽減する可能性もあるだろう。

一方小学生は、『赤ちゃん事業』で実際に赤ちゃんやその保護者とふれあう前から赤ちゃんの姿を具体的に想像し、その発達段階の特性や未熟さに意識を向けながら、気を付けることや心配だと思ふことを率直に表現していた。また、その後の『おおきくなったね』では1度目の『赤ちゃん事業』よりも気を付けたいこと、心配なことに関する記述が減少したものの、赤ちゃんを泣かせることや怪我をさせることに対する懸念は残っている様子が窺えた。これらの懸念は、小学生が赤ちゃんとふれあう前に《心配なことや気を付けようと思ふこと》として、主に[赤ちゃんが心地よく過ごすこと]と[赤ちゃんの安全を守ること]として挙げている回答内容と一致している。その後、実際にふれあった感想として「好きなことや嫌いなことがあることがわかった」「初めは(自分を見て)不安そうだったが、時間がたつと慣れた」「お母さんが抱っこをしたら泣き止んだ」「自由気ままに泣いたり笑ったりしていた」等、様々な赤ちゃんの姿を見て、赤ちゃんについて発見したり考えたりしたことがわかる。赤ちゃんに関わる経験によってそれまで小学生が不安に思っていたことが一気に解消するのではなくとも、まずは赤ちゃんを知るという点で、ふれあうことには大きな意味があると言える。

そして小学生は、赤ちゃんと直接ふれあい、また再会することによって、その成長を実感するとともに、さらに今後の赤ちゃんの姿に思いを馳せ、興味を持っていることが明らかとなった。加えて、赤ちゃんの成長を知ることは、赤ちゃんとふれあうことに消極的だった小学生の赤ちゃんとの交流に対する前向きな気持ちを育てることにつながっていた。事業実施前に小学生が赤ちゃんについて考え、様々な不安を抱えながら複数回のふれあう実体験を経て、そこで生まれた赤ちゃんに対する愛おしさ、そして今後の育ちへの期待は、いずれも「いのちを育む」ことを目的とした本事業の成果と言える。小学校高学年の時期は、他者との比較によって自尊感情の低下などにより劣等感をもちやすくなるため、自己肯定感の育成が重視すべき課題のひとつである<sup>1)</sup>。情動的に心が動かされる感動体験は小学生の自己効力感や自己肯定意識を高める<sup>2)</sup>と考えられており、赤ちゃんに対する愛おしさを感じるということは命を大事に思うということだけでなく小学生の自己肯定感を高めることにもつながる可能性がある。インターネット等を通じた疑似的・間接的な体験が増加する半面、直接体験の機会が減少していることは、現在の我が国における小学校高学年の時期における子育ての課題であり<sup>3)</sup>、赤ちゃんと直接ふれあう体験はこの課題を克服する一助になるとも言える。

さらに、小学生は、事業後の感想として保護者や親子の姿についても多く言及している。小学生は保護者とも関わることで赤ちゃんが育つ背景にも触れることができ、親子の関係や親の思いにも目を向ける機会を得ている。つまり、小学生にとっての赤ちゃんとのふれあうことの意義が、保護者の存在によってさらに深まったと考えられる。物事を対象化して認識することができるようになる小学校高学年の課題として、自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養が挙げられており<sup>4)</sup>、この時期に親の思いを考える経験をすることは発達段階に沿った重要な経験であり、人格形成においても意味があると言えるだろう。

以上の結果から、本事業は保護者・小学生双方にとって様々な意味や意義がある互惠性を兼ね備えた経験となったことが明らかとなった。また、保護者のアンケートの回答に「自身の赤ちゃんが、地域交流での一つの役割を持っているのではないかと感じました」というものがあり、事業を通してこういった赤ちゃんの存在価値に保護者も気付いているということが窺える。それぞれの経験のために、保護者と小学生がともに役割を果たしていることに加え、赤ちゃんも不可欠な役割を担っており、赤ちゃんの存在そのものの価値が示されたとも言える。さらに、このような多様な事業の意義を実感したであろう保護者のアンケートでは、「自分が小学生の時ではなかったのですごくうらやましいです」「これからも小学生・赤ちゃんのためにこの事業続けてほしい」「赤ちゃんとのふれあう機会が、(今日赤ちゃんとして参加した)自分の娘が小学生になった時にもあればいいなと思います」と事業の継続を望む声もあれば、「兄弟児(小学生)も、赤ちゃんふれあいあったらいいのにと一と言っていました。様々な学校であると良いなと思います」「赤ちゃんふれあい事業が市内各校であればと思いました」「ぜひ中学校にも参入していただきたいです」という事業の展開・広がりを期待する声も挙げられている。また、参加した保護者の中には育児休暇を取得中の小学校教員もおり、「自分の職場でもやってもらいたい(小学校教師)」という声もあった。実際に、今年度は潮見小学校と船越小学校から事業への参加申し出があり、小学校現場でも事業の存在とその効果・意義が認知されつつあるとも考えられる。さらに、昨年度1組であった父親同伴の夫婦での参加者が、今年度は3組にまで増加している。アンケートの結果及びこのような佐世保市の小学校の動き、そして参加する保護者の姿から、

佐世保市が平成27年より取り組んできた『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』の意義が市民に認められつつあり、また更なる広がりが囑望されていることが示唆される。今後これまでの事業で培ってきた成果と課題を念頭に、事業の展開・拡大を望む声に行政としてどのように答えていくのかについても検討される必要があるだろう。

#### 脚注

1),3),4) 文部科学省(2009)「子どもの徳育の充実に向けた在り方について (報告)」

2) 佐伯伶香他(2006)「児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす影響」九州大学心理学研究7、pp.181-192

6月・11月実施 『赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業』 アンケート項目

小学生事前アンケート		保護者事前アンケート	
問1	性別、きょうだいの数、自分はきょうだいの何番目か	問1	年齢、性別、赤ちゃんの月齢、きょうだいの数、第何子か
問2	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること(自由記述回答)	問2	小学生に対するイメージ(自由記述回答)
問3	これまで赤ちゃんとのふれあいがあったか、ふれあった対象	問3	事業に参加した回数
問4	赤ちゃんとのふれあいで心配なこと、気を付けること(自由記述回答)	問4	小学生とのふれあいの頻度、その内容
問5	赤ちゃんとのふれあいが楽しみか、その理由	問5	保護者自身が小学生や中学生の時、小学生未満の子どもとふれあうことがあったか、その内容とその時感じたこと
問6	赤ちゃんの保護者に聞いてみたいこと(自由記述回答)	問6	事業に参加しようと思った動機
問7	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者と会ってみたいこと(自由記述回答)	問7	子育てをしていて嬉しい、楽しいと思うことはあるか、どのような時か
		問8	子育てに対する不安や気になることはあるか、その内容、相談相手の有無、相談する相手
小学生事後アンケート		保護者事後アンケート	
問1	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること(自由記述回答)	問1	小学生に対するイメージ(自由記述回答)
問2	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者と会って感じたこと(自由記述回答)	問2	事業に参加してよかったか、その理由
問3	赤ちゃんの様子で気付いたこと(自由記述回答)	問3	事業に参加した感想(自由記述回答)
問4	赤ちゃんの様子を見られてよかったか、その理由	問4	赤ちゃんにとって小学生とふれあうことはよいことか、その理由
問5	赤ちゃんの保護者と話したか、その内容	問5	小学生のイメージの変化の有無、その内容
問6	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者とかわるときに気を付けたこと(自由記述回答)	問6	小学生にとって赤ちゃんとのふれあいはよいことか、その理由
問7	赤ちゃんとふれあったか、ふれあった内容とふれあって気付いたこと。ふれあわなかった場合は、今後どのようにふれあいたいのか	問7	この事業にまた参加したいか、その理由
問8	この事業にまた参加したいか、その理由	問8	事業への要望・意見(自由記述回答)

11月実施 『おおきくなったね』事業 アンケート項目

小学生事前アンケート		保護者事前アンケート	
問1	性別、きょうだいの数、自分はきょうだいの何番目か	問1	年齢、性別、赤ちゃんの月齢、きょうだいの数、第何子か
問2	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること(自由記述回答)	問2	小学生に対するイメージ(自由記述回答)
問3	赤ちゃんともう一度会えるのは楽しみか、その理由	問3	事業に参加した回数
問4	6月事業後に赤ちゃんのことが気になるようになったか、それはどこでどんな時か	問4	普段の小学生とのふれあいの頻度、その内容
問5	6月事業後に赤ちゃんとのふれあう機会があったか、どこでどのようなときにふれあったか、その時何を思ったか	問5	第1子が生まれる前に、小学生未満の子どもとふれあう機会があったか、どこでどのようなときにふれあったか、ふれあった内容とその時感じたこと
問6	赤ちゃんは6月と比べて、どのようなところが成長していると思うか(自由記述回答)	問6	事業に参加しようと思った動機
問7	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者とふれあう時に心配なことや気を付けたことはあるか、それはどのようなことか	問7	子育てをしていて楽しい・嬉しいと思うことはあるか、どのような時か
問8	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者に聞きたいこと・したいことは何か(自由記述回答)	問8	子育てに対する不安や気になることはあるか、その内容
		問9	子育てに関する相談相手の有無、相談する相手
小学生事後アンケート		保護者事後アンケート	
問1	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること(自由記述回答)	問1	小学生に対するイメージ(自由記述回答)
問2	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者と会って感じたことや考えたこと(自由記述回答)	問2	保護者自身は事業に参加してよかったか、その理由
問3	赤ちゃんは6月と比べてどのようなところが成長していたか(自由記述回答)	問3	赤ちゃんが事業に参加してよかったか、その理由
問4	赤ちゃんの様子を見ることができて良かったか、その理由	問4	小学生にとって、赤ちゃんとのふれあいはよいことか、その理由
問5	赤ちゃんにさわったり、抱っこしたりしたか、その時気付いたことは何か、ふれあっていない場合はふれあえなかった理由	問5	(6月参加者のみ)6月に比べ、小学生の変化したところ、変化していないところ
問6	赤ちゃんの保護者と話したか、その内容	問6	小学生と交流して自身に変化はあったか、あったとしたらどのようなところか
問7	今後機会があれば赤ちゃんにふれたり、抱っこしたりしたいか	問7	この事業にまた参加したいか、その理由
		問8	事業への感想・要望・意見(自由記述回答)